

審 査 の 結 果 の 要 旨

氏 名 呉 文 浩

本論文は中国の高付加価値ジャポニカ米に焦点を当て、文献レビューや現地調査を通じて、生産者所得への影響、消費者の嗜好性、そして高付加価値農産物の政策現状と課題を明らかにしている。本研究は今後重要になってくる農産物の高品質化を意識し、川上と川下からの実証研究が少ない中で、ジャポニカ米の高付加価値化への取り組み等の評価を試みた貴重な研究である。

本論文は8つの章から構成され、全体の背景と研究の意義を第1章で概説している。コメは最重要食料として、量の確保は最重要な政策課題である。一方、2000年以降、食の高度化に見られるように1人あたりのコメ消費量が減少に転じ、消費者の品質へのこだわりが増している。量を重視する生産者と質を求める消費者間に矛盾が生じている。このような背景下において、近年需要が高まりつつあるジャポニカ米のうち、高付加価値化ジャポニカ米を研究対象に選定し、研究課題として①生産の収益性と契約方式の農家所得への影響の解明、②消費者の嗜好性と高付加価値米の購買行動の解明、③高付加価値化農産物への生産支援政策の比較を取り上げている。

第2章では、研究課題に合わせ、文献レビューを展開している。レビューの対象分野は稲作の収益性分析、高付加価値化農産物の消費、そして補助金政策である。本研究の貢献は、これらの側面から、主食の一部である高付加価値化ジャポニカ米を研究対象に絞り込み、生産収益性の解析、高付加価値ジャポニカ米生産への参入可能性の明確化、消費者の属性と嗜好性分析と地域の特徴、現行の高付加価値農産物の補助金政策と先進国の政策との比較により、体系的に実証研究を行っていることである。

第3章はコメの需給情勢を整理分析している。中国のコメはインディカ米とジャポニカ米からなり、それぞれの需給統計が公表されていない。ジャポニカ米の生産データを推計している。また1990年代以降急速に一大産地となった黒竜江のジャポニカ米の生産を概説している。

第4章はジャポニカ米生産の収益性を、南北の代表産地のコメ生産のコスト構造と収益性を分析し、収量への影響要因を明らかにしている。高付加価値化ジャポニカ米の分析を進めるため、代表的なブランド米産地である黒竜江省五常市で農家への聞き取り調査を実施し、78の有効サンプルを得た。プロビットモデルと重回帰分析を用いて、契約方式が稲作農家に高い農家価格と収益をもたらすことを明らかにした。有機栽培や「緑色生産」への取り組み経験のある農家はより契約形態に組みやすいことを明らかにしている。

第5章はジャポニカ米と有機米に分けて消費者嗜好を調査し分析している。調査はインターネットを通じて実施し、1,371の有効サンプルが得られた。ジャポニカ米の消費者嗜好分析では順序ロジット回帰と多項ロジスティック回帰を用いて、ジャポニカ米の購入に影響するファクターを解明し、高価格帯ジャポニカ米の消費者層は所得、健康意識、政府の監督機能への要求も高い

ことを明らかにしている。また、ロジット回帰分析を用いて、消費者の認知、知識、態度が有機米の購買行動への影響を解析している。

第6章では、有機農産物への支援策を中心に、中国、米国および EU の中でも有機農業生産が盛んなドイツとの有機農業補助金政策を比較分析している。中国は安全性と健康の側面が消費者に多く認識され、ドイツとアメリカでは環境に優しい農業として政策が取り組まれている。農業発展の観点から中国の現行政策を再考すべきと結論づけている。

第7章はこれまでの分析結果を要約し、第8章では本研究の意義と今後の課題などをまとめている。

以上のように、本研究は注目されている主食のジャポニカ米、特に高付加価値をもつコメについて、現地での聞き取り調査、インターネット調査、統計資料や文献、政策などに基づいて、ミクロ経済的アプローチや比較研究などにより、高付加価値化ジャポニカ米の生産、消費、関連政策の現状と課題を明らかにした。これらの研究成果は、学術的にも社会的にも寄与するところが少なくない。よって、審査委員一同は本論文が博士（農学）の学位論文として価値あるものと認めた。

審査の結果の要旨

氏 名 本郷 太郎

(※履歴書の記載と同じにしてください。)

A large grid of 250 small squares, arranged in 10 rows and 25 columns, for handwriting practice.

これらの研究成果は、学術上応用上寄与するところが少なくない。よって、審査委員一同は本論文が博士（農学）の学位論文として価値あるものと認めた。

※「文書ファイル（Word 等で作成したもの）」及び「PDF ファイル」を提出してください。